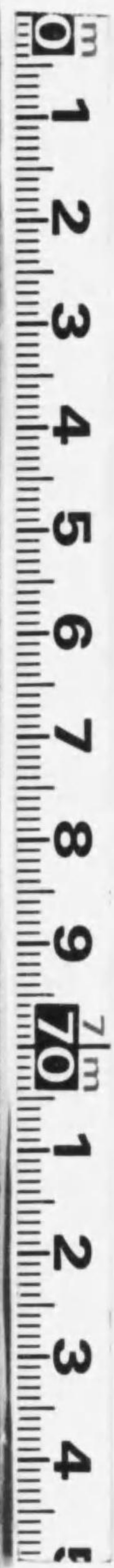


特 248

281

三原地方二千六百年史

三原圖書館



始



大義を八紘に宣揚し坤輿を一字たらしむるは實に皇祖皇宗の大訓にして朕が夙夜眷々措かざる所なりとの大詔を煥發あらせられしは實に一億臣民の恐懼感激に堪へざる所である、時恰も皇紀二千六百年に遭遇す一層感憤興起するものあるを信するのである、特に當地方の如き多年皇室御領地として格別の天恩に浴したるもの愈々協心戮力聖慮に副ひ奉らねばならぬことである、茲に先賢祭に當り小冊子を頒つ所以のもの亦この微衷の一端に外ならぬ次第である。

昭和十五年十月十日

三原圖書館長 澤井常四郎



三原地方二千六百年史

一、はしがき

中國四國の兩山脈に抱かれ、山高からず、谿深たにからず、島青く波穩なだかに、五風十雨、土肥は民豊に風光明媚、變災少き地、彼の理想とせる武陵桃源ぶりやうとうげんもよも之には及ばざるべしと想はるゝの境、此地に生を稟くるもの誰か天恵の厚きを感じざるものあらん、況して多年御領地として格別の皇恩に浴せしことを思へば一層の歡喜に滿ち感鳴の涙に咽なみぶものあるべきである、今や國家の危急存亡の秋に當り我々祖先の順民たるのみならず海外まで發展せしことを想ひ合せて大に奮起して皇謨こうぼを翼賛し奉らねばならぬのである、今三原を中心として四方約五里の圓周を畫き之を假りに三原地方として其内の遺物歴史傳説により此編を作り世に問はんと欲するもの亦微意の存するものである、

二、皇室との關係

甲、土地

沼田庄。

後白河院の御代長寛二年に建てられた蓮華王院の御領であるのだ、それは文永三年四月の關東下知狀に「當庄は蓮華王院領たるの間彼の修造の爲め檜を禁制せしむるの處」とあるので明かである、それが土肥遠平の時から地頭となり應永の頃迄は猶御領として年貢を納めたものと思はれるのである、

因島庄。

同じく後白河院の御代長講堂御領とせられたのである是時は只因島とあるのみで庄名となつて居ない是は建久二年の長講堂領目録に載つて居る、貞應元年には中庄、重井、三津の三庄に分れて居る建武四年因島地頭方年貢注文に據れば惣都合鹽壹千六百六拾五俵三斗五升六合、錢二百三拾三貫三拾六文米五十八石五斗八升九合四勺七才、麥四十二石九斗五升九合三勺五才とあつて相當の鹽を産出したことが知られる、應永十四年には因島庄とあるのだ、

生口北庄。

建久の文書に見えて長講堂領であるのだ南庄もあつたのだが後のものに見えて居る、後白河院の宮女が御寺の地に隠れたと云ふのも此關係で知られるのである、

鹽田庄。

鳥羽院第三皇女暉子内親王即ち八條院の領地であるのだ、後院の御建立の安樂壽院領となつて居る是は向島の地と推定するのである、對岸の地に御所と稱する地のあるのも一證とするに足るので、因島と同じく多量の鹽を御料として貢納したことを想像せられるのである、

垣田庄。

龜山院の御領で嘉元三年の文書に見ゆ、領家職は臨川寺三會院である、其前延應元年には二品尊性法親王の領であつたのだ、龜山院は皇女昭慶門院喜子内親王に譲られた、其地點は今の八幡村垣内の地だ、此地は初め藤川百川の封戸地であつたので後御領となつたものと思はれる、

塚^い庄。

御願寺妙香院尊道入道親王御領である永祚二年及六康平年の文書に載つて居る其前應和元年には九條右大臣師輔の領地であつたのだ、是は今の坂井原に當るのだ、以上が御領地で神社領を擧げれば

歌の御厨

伊勢内宮領で今の向島東に當るのだ

都^つ宇^う庄。

竹原庄

賀茂社領で今の竹原新庄等の村々に當る、郡名の起りしを見れば地域も廣く勢力の強大なりしことを知られるのだ、

八幡庄

河^か南^{なん}庄。
神^{かみ}村^{むら}庄。

以上は最初藤原百川の封戸地で、八幡社の出来てより一部は御領となり一部は石清水領となり其他は猶藤原領であつたと推定されるのだ、

杭^か庄。

伏見稻荷領である、之に連続して太田庄が後白河院領であることを思へば如何に此地方が皇恩に浴して居つたかが想像せられるのである、

乙、人

1、神武天皇大濱の地に上陸せらるゝとの傳説

神武天皇が御東征の際、安藝國埃宮あきのみやに御滞留あらせられたといふ、其地點は文部省の委員會で認められたのであるが、其際因の島大濱に上陸あらせられたとの傳説があるのである、是は瀬戸内海の

中央航路から海岸路に入り来る處であるから、御東航の際防衛の爲め兵船を進められたと想像の出
來ぬこともないが固より傳説に止まるものである、

2、神功皇后糸崎に於て水を汲取り給ふとの傳説

神功皇后三韓征伐の時兵船を糸崎の地に寄せ給ひ土人兵船用の水を差上げた、それにより此地方を
水調郡といひ其井戸を長井といひ其地を井戸崎といふのだと傳へて居るのだ、

3、味瀉の浮鯛の傳説

同じく三韓征伐の時味瀉御航行の時魚類が澤山泳いで居るので酒を注がれた爲めに魚類が皆酔ふて
浮び出た、今日も猶鯛が浮ふのはそれが爲であると云ひ傳へて居るのだ、人間よりも魚類の方が能
く傳説を覚えて居るものと見える、今は能地の浮鯛と云ふのである、

4、應神天皇妃を吉備に送り奉る

應神天皇廿二年皇妃兄媛、郷里に歸りたきことを仰せらる依つて淡路御原の海部八十人之を吉備に

送り奉るとあつて是が爲めに三原の地名が起つたと云はれて居るのだ、

5、遣新羅使の船長井浦に泊す

天平八年四月安部繼麿を新羅に遣はされた、其時副使である壬生の使主宇陀麿といふものが長井浦
に泊つて其時の歌三首が万葉集に載つて居るのだが、是は船木から出た材木で船を造り此處で乗代
へると云ふやうのことがあつたのではあるまいか、長井浦は三原の灣口であるから今の糸崎邊と見
てよからう、

6、和氣法均尼備後に流さる

精忠無二の清麿の話となつたが引削道鏡の無道の欲求を矯めんとして清麿が神勅を奏聞したが爲め
に遠流に處せられ大隅に配せられ法均尼は近流で備後に流された、時は神護景雲三年六月のことだ
其配處に就いては確證は無いが、三原の背面に六百六十米突の高峰がある、其頂上には八大龍王を
祭つて龍王山といふのだ、其東の小高き處に虚空藏堂があり文政頃まであつて其地上から布目瓦の
破片が出るのだ、そして山の八合目位の處に道明寺跡といふのがある、道明寺糺で有名な大和にあ

るものと同じ性質の寺で御願で各地に建てられたもので山上にもまだ外に佛堂があつたかも知れぬ、山下には夫々の神社佛堂があつて一大靈場を現出して居つたものと見ゆる、一方此一大事件には背景とも援護者とも云ふべきものがあつて其の主たるものは藤原百川である、其百川の封戸即ち領地が備後にあつて、此地と思はれるのだ、彼是を考へて法均尼の流謫地は此道明寺であらうと推想されるのである、是については色々の傳説もあるが今は之を省くこととする、法均尼は每朝山上に登り遙に九州の地を眺めて清麿の無事歸還を祈り宇佐八幡神を祀り懇請を込めて居つた、其八幡神を祀つて社殿を建てたのが今の御調八幡であるのだ神殿には清麿法均を合祀してあることは云ふまでもないことだ孝謙天皇の御寫經や寶龜年間のもの、傳つて居つた事も是でうなづかれる譯だ、

7、源平戦争と沼田の海賊

元暦二年二月義經は平家を屋島に破つた、平家西航して長門壇浦に至る、平家は勿論安徳天皇を奉じて居るので沼田の海賊は其御供をして居るのだ、海賊の頭領は沼田五郎と云ふので、都宇竹原生口島等の庄官まで隨從したといふことが貞應二年の古文書に見えて猶庄官達は承久の乱にも朝廷方として入洛したと云ふことであるが、沼田の海賊は壇浦の戦で平家方が負けたので全部敗滅の悲運

となり蔭も形もなくなるまでに打ちのめされ、其勢力範圍であつた因島生口、鷺の島々まで北條方に取りられてしまい、兵士船頭は皆陸上にあがり蔭を潜めたのだ、それが後谷や旗はたのうねに隠れて所謂平家の落人と云ふのである、猶ほ卑怯な奴は八幡や堺原邊まで逃げたものと見えて平家の城と云ふやうな地名が所々にあるのだ、

8、後鳥羽天皇潜幸あらせらるゝの傳説

承久の乱、事終りて後鳥羽院隠岐へ遷幸の餘儀なきに至ると云ふ前例なき大變となつた、時に院は糸崎にて御上陸あらせられ、甲山吉舍路きさじを出雲へ向け御潜幸あらせられたと云ふ傳説があるのである、

9、建武中興の際の勤王の人々

櫻山慈俊さくらやまのちとゆ 備後太平記に據れば三原櫻山の城主櫻山慈俊は義兵を擧げ凶徒を平げながら一宮まで進んだとあり自刃後乳母と家來とが幼兒を抱き三原に歸らんとして、中野の殿迫とんせきと云ふ處に留まつたと高垣氏の系圖にあつて其地には多數の墓を存し菩提寺には梵鐘ぼんしょうを寄附して居るのだ、高垣とは家

因島本主治部法橋幸賀

其の出自については未だに明瞭でないが、或は小早川系の人かも知れぬ、開發本主であるが後の高濱社領として推定せられる大濱邊を開拓した人ではあるまいか、元弘三年後醍醐天皇御還幸の前、京都に於て千種赤松等と六波羅を陥れた其時四月三日、八月廿七日の戦に於て子息郎從等討死したので「尤も以て不便の次第御感あるべき也」と大塔宮護良親王から五月八日の令旨が下り今猶保存せられてあるのだ、

村上三郎左衛門尉義弘

義弘と幸賀は同一人でないこと義弘の因島に在住しないことは殆ど史家の通論となつて居る、けれども此地が義弘の勢力圏であることは誰も異論はない、随つて地方の人々が之を顯揚し景仰することとは何等の不思議もないことである、義弘は時代は後れるが正平廿年に河野道尙今岡通任等と共に九州に渡り征西將軍懷良親王の命により豊前豊後の諸所に轉戦し後伊豫に歸り温泉風早等數郡を切り離け成良親王の下向を仰きて一時官軍の全盛を占め一時南朝方一大根據地となつた親王方の多數此地に入られたのも之が爲めであるされど遂に志を得ずして終つた、大正八年正五位を追贈せらる

浄土寺空教

當時は浄土寺も多少の僧兵もあり武士や海賊達に對しても相當の勢力のあつたものと見れ、南北雙方の争奪の場所となつて居るのだ、後醍醐天皇は船上山より遙に綸旨を賜はつて居る、

備後國浄土寺住侶等致御祈禱之精誠奉祈天長地久御願者綸旨如此悉之

元弘三年四月九日

勘解由次官

浄土寺空教御房

そして此の御綸旨に對して相當の勳功あつたものと見れ同年十一月三十日には因島地頭職を賜はつて居るのである、

太田莊地頭職左兵衛尉三善信連

少し場所は遠かるが、最も重要な地位に働いた人のあることは忘れてはならぬ、世羅郡山中郷地頭職である三善信連が正成と共に凶徒討伐に向つたことである、其子資連の寄進狀に因ると、建武元年十月に紀州飯盛山に北條の殘黨が起つた、此時信連は勅使として楠木河内大夫判官正成と共に高野山の衆徒を引連れ發向した、衆徒等奮闘の結果之を平げたので其軍忠を感じ、累代繼承の地頭職

を以て領家たる高野山大塔に寄付して仕まつたので、私賞までやつて居るのだ、滅私奉公の好模範と云つてもよいのだ、

10、小早川隆景

隆景は毛利元就の三男で天文二年郡山城中に生れ幼名を徳壽丸と云つた、天文十三年に竹原小早川を嗣き同二十年に沼田の小早川を相續して兩家を併せたのだ、十五歳の時元就の命により五箇坪生の戰に神邊山名理興たじまの兵を破つた、是が初陣だ、嚴島の戰に陶晴賢すえはるが嚴島宮崎に陣し宮の城を攻めたのは弘治元年九月廿一日の事だ、元就は廿四日郡山を發し草津に陣したが身方の水軍は河の内の五六十艘と隆景の六七十艘だけで迎も陶軍に敵すべくもない、乃で隆景は浦宗勝ひなかつを來島にやつて村上氏の援を請はしめた、廿八日に至り漸く村上武吉三百艘の兵船を率ゐ來り會したので士氣大に振ふた、陶軍を全滅させたのも是が爲である、弘治三年には山口に攻入り大内氏を亡した元就此時六十一歳長文の教訓狀を作り互に和衷協同せんことを請ふて三子に與へたのが十一月廿五日の事である、尼子の征服には隆景は主として水軍を率ゐて大友氏に當つて牽制運動をなして居る、石州溫湯城攻めには隆景は三吉、檜崎、有地等の兵を以て東北より攻め入つた、其後所々に戰ひ遂に四年を経て永祿九年十一月廿八日尼子義久等富田城を去つて事平いだのである、翌十年には伊豫の河野通

宣、大津城主宇都宮豊綱と争ひ翌年に至り毛利氏に援を請ひ隆景は二万五千の兵を率ゐ伊豫に渡り援け戰ふて豊綱を三原に囚へ一國平定した、十二年閏五月には立花城の戰も終を告げた、十月廿五日には大内氏との山口對陣も輝弘の自殺に終つた、元龜二年六月元就没後尼子の殘黨も平いた、天正十年三月十五日秀吉は播但因三國の兵を率ゐ備中に向つた、隆景は其前三原を發し備中都窪郡福山城に入つて止る、毛利氏では諸將を集めて雌雄を決せんとした、秀吉は龍王山に陣したが福山とは一里半を隔つるのみだ、尋いで秀吉は宮地山冠山を陥れ加茂城を攻めた、高松城は清水宗治其一族と之を守り隆景之に援兵を送つた、四月廿七日秀吉之を攻め多數の死者を出して敗退した、五月七日日本陣を蛙ヶ鼻に進め水攻を策した、處が六月二日信長が光秀に殺された變報四日秀吉の陣中に達した、秀吉は俄に態度を換へ宗治と末近信賀の切腹を條件として和議を結んだ、是れが秀吉と隆景の手を握るの初めで遂に終世相換らず水魚の間となり大功を奏したので秀吉は隆景の智を知り隆景は秀吉の力に感服したのである、

天正十三年には秀吉の根來雜賀の一揆を平ぐるに當り輝元隆景から水軍を出して之を助けた、續いて四國征伐となり六月には伊豫一國三十五万石の大大名となつた、

同十四年九州征伐始り隆景先づ出征し翌年三月秀吉も九州に下つた、途中三原に宿し二日逗留し歎

待を受け普請の用意周到なるを賞して居る、島津義久五月八日川内せんだいに於て秀吉に謁し罪を謝し事済みとなつた、それで隆景は伊豫の領地を返し筑前一國筑後肥後各二郡を宛行はれた、

秀吉は此時既に海外經略の雄圖を懐いて居つたことは五月十五日の書狀にあるのだ、

國之置目等被_レ仰付_二御際明次第、筑前國至_三博多_二被_レ移_二御座_一彼地自_三大唐南蠻國々_二船着候間、

丈夫に城普請可_レ被_レ仰付_二候、然者高麗國へ被_レ差遣人數可_レ被_レ成_二御成敗_一事

とあるので知られるのだ、其筑前筑後を隆景に與へたことは其人物材幹を信頼して博多の警備を托して外征の基地を固めしめやうとしたものである、

十九年八月愈征韓の兵を出すこと、なり隆景は文祿元年三月廿日名島を發し渡韓した、秀吉は三月廿六日進發し此時も三原に一泊したのである、其碧蹄館へびていかんの戦は有名なもので細説に及ばぬ、隆景は二年九月に歸朝した、

隆景は其後に隠居して五万石の隠居料を支給され數々の優遇を受け慶長三年六月十二日薨去し米山寺に葬つた、隆景の知行は毛利家の部將として六万六千石本知行三拾万七千三百石合計三十七万三千三百石である、その三原城を築いたのは系圖には永祿十年二月成とあり大日本史料には天正十年となつて居る、

弘治三年十一月廿七日正親町天皇御踐祚の事ありたれど騒乱の爲め御即位の禮を行はせらるゝこと六ヶ敷依つて元就は其料を調進し奉り永祿三年正月廿七日漸く古例の如く行はせられた、隆景も其議に與つた賞として中務太輔に任官仰付けられた、

元就の教訓狀に「元春隆景之事他名之家を取續事候雖然是は誠のとうさの物にてこそ候へ」とあるが隆景は之を實現し宗家隆元の死するや秀吉が一族のものを以て毛利家を嗣がしめんとするの意あるを知り俄に秀秋を乞ふて小早川の相續をさせたのであるが實は隆景には陽平てんひやうと云ふ一子があつた米山寺の系圖には實は隆景三男母は正平妾、誕生は高山、故あり幼にして父の勘氣を蒙り密に賀茂郡黒瀬の郷馬木村に住む、後祖廟の近く沼田舟木村大願の屋敷にあり慶長十五年八月五日卒すとあるのだ、大願の屋敷は古高山の北麓にある、全くとうさのものにてこそ候へを實行して宗家を建てたのである、即ち忠孝の心深き人であつたことが知られるのである、明治四十一年正三位を贈られた、

11、明治維新の勤王家
浅野忠あさのただし

三原第十一代の城主、初め忠助と云ひ遠江と稱し榎蔭と號した廣島藩首席家老で天保十四年廿五歳の時職を嗣いだ、嘉永年間米艦渡來以後幕府各藩に命じ軍備を修めしめた、乃で在來の軍法を廢し洋式訓練を行はんとしたれど新舊兩派の確執甚しく容易に決しない是に於て忠は八丁馬場にある自邸の書院を破壊して訓練場とし洋式軍法を教へた、されど本藩の改革は中々容易のことではない、加ふるに時の執政今中大學秘政ひせい多くして坐視すべからざるものがある、銀五匁の藩札錢一文と交換し、政治を批判するものを厭ふが爲に士人机上圖書を置くさへ遠慮するに至つた、是に於て同心のものとなり大學を招き之を忠告し意見書を送りて改めさせようとしたこと數回に及んだが更に効果を認めない、遂に江戸に在る藩主に内告することに決し家臣脇本武兵衛吉村秋陽の二人を遣した、嘉永六年十一月の事である、事は順調に運び藩主の耳に入り政權は他のものに移りたれども未だ實効を見るに至らず、士民の怨嗟日々に加はるのみだ、安政二年藩主國に就く依て面上意見を陳述した藩主之を實行せんとしたが拒むものあり再び蹉跌するに至り危難身に及ばんとしたので三年三月遂に職を辭し三原に歸つた、鬱勃たる報國の熱血迸り出で遂に三原の防備となつた、同母弟丹羽精

藏に内命を與へ京坂に遣し諸藩の動靜を探らせ軍師筑紫彌之助を下曾根金三郎に就き阿蘭陀式軍法を學ばせ、三原に在つては櫻山の山頂及山麓に砲臺を設け本城を護り文久二年五月東野村福頼の地（今の糸崎驛西）に二千坪の土地を購入し新に砲臺を築き巨砲數門を架す、塹壕を穿ち兵舎を設け日夜守兵を置く、須波の地に遠見番所を設け五色の旗を以て信號をさせたのだ、又砲臺には宿營の通辨を置き外船の來る時は直に行いて検査するのだ、或時英船が來たので檢閲に出懸けた處が大變に優待せられたので悦んで長篇の詩を作つた人もあつた、又士分の子弟を集めて三箇大隊を組織し英人其ブラツクモール兄弟を雇ひ訓練し領内の若者を召集して農兵を作る等力の限りを盡して居隊の携帯せる小銃の獨逸製ゲーベル銃なるが如き如何なる方法により手に入れしかを疑ふ程である長州征伐の時某藩士が擬造の木銃を重そうに擔ぎしに比べて實に雲泥の差があるのだ、續いて元治元年松濱港（糸崎）を築いたのも亦海防の一手段であつたのだ、諸方より時々的情報を集めて數百篇となし今猶保存されてあるのだが是が僅か三万石小支藩の行動であることを見る時は全く報國の熱意に據るものであることを知るに足るものがあるのだ、後正五位を贈られた、

〇〇〇〇
丹羽精藏

名は秀明博愛と稱す世々淺野家に仕ふ、安政二年十八歳にして江戸に出で劍客に學び歸りて講武所助教となる、幕政の益々度を失ふを慨し諸藩を巡遊し勤王の士と交る文久元年京都に入り公卿の間に入らせしを以て藩に囚へられること一年漸く免された、同二年一月森田節齋大橋慶之助等と義兵を擧げんとして成らず節齋と共に大和に逃る、元治元年京都に在つて坂本龍馬と堀川通を通過せしに新撰組のもの六人に追跡され前後から圍まれた、二人共に身を翻し各一人を斬る残りのもの避易したる間に逃れて土佐邸に入つた、慶應元年大阪にて新撰組隊長近藤勇の凶威を逞うするを惡み天誅を加へんとして果さず、二年に再び幕徒に襲はれたが幸に事なきを得た明治元年正月伏見鳥羽の捷報至る精藏三原にあり城中大評定となり家老戸田慶山拾數人の士人を引連れ上京することゝなる精藏も其中にあつた、上京後は別段の事もなく無爲に苦しむの有様であつた三月十三日木屋町の精藏の旅宿に幕徒襲ひ來り流石の精藏も抗する能はず遂に殺害された時に年三十だ正五位を贈らる、

鴻おと雪ゆき爪つめ

中之庄宮地家に生る、六歳の時出家し清拙といひ鴻爪といひ還俗後今の名に改めた、長して大垣全昌寺に住す、寺は戸田家の菩提所で曹洞宗の名刹だ、前に師無底むていの從僧として住み、今亦藩主の招

きにより還り來つた、弘化三年四月晋山式を行つた、城代家老小原鉄心は勤王輔藩能く維新の大政を翼賛した功臣である、之と深く交り水魚の如きものがあつた、安政五年二月松平春嶽の招きに應じ福井孝顯寺に移つた、春嶽が維新前後の活動には暗助する所が多かつた、慶應三年には再び招かれて彦根清涼寺に移つた、翌明治元年に五箇條の御誓文が下つた此時感ずる所あり建白書を奉呈し神儒佛の三教を以て耶蘇教を壓倒し國民思想を統一すべしと云ふのである、然るに廟議の大勢は廢佛毀釋にあるのだ此間翁の苦心頗る大なるものありし様だ、小原鉄心と嵐峽に遊び肥前侯鍋島閑叟を一言の下に説き伏せて朝廷方としたことは有名な話だ、此際翁の寓居は三本木の山陽の山紫水明樓の隣星巖の古居であつた、退朝の重臣達日々立寄り談笑に時を消して居たので全く重臣クラブの觀があつた、此間翁幾多の意見が政綱の中に織り込められ所謂暗贊冥翼した所以である同六月北征軍事總裁仁和寺宮東下せらるゝに當り翁彦根の寓居に夜半使を遣し參謀に補せんとせられたが翁は

湖月林風閑に臥するの辰

羽書何物ぞ夜人を驚かす

山翁別に濟民の策あり

肯て兵間馬尾の塵を逐はんや

の詩を作つて固辭した、十二月には至急東京へ罷出づべしとの命が下つた、實は當時京都には凶徒横行し危険の翁に及ぶを以て岩倉の計ひで避難させたのである、二年五月教導局御用掛を命せられた、一日出仕神道者と激論したが到底一致を見る能はざるを知り再び出でず、六月十日には職を辭し歸山した、四年八月再び上京し九月左院少議生に任し反俗を申付けられた、五年四月教部省を置き御用掛を命せられ九月神佛合併の大教院々長となつた、八年四月分離して神道大教院管長となる十七年任を辭して閑地に就いた斯くして維新の際の宗教的思想問題を解決したのである、廿九年特旨を以て従四位に叙せられ三十七年六月十八日終焉を告ぐるや三百圓の祭料を賜はつた、山高水長圖記三卷を著し知友た頌つた、

〇〇〇〇〇
池田徳太郎

快堂と號し諱を正眞といひ徳夫と稱し後種徳と改めた、天保二年十月忠海に生れ、父は醫者で元琳と云ふのだ、幼時嚴島神社に參詣し學問して天子様の御用に立つことを祈つたといふことだ、十一歳清田黄裳せいでんこうしやうに學ひ十五歳九州に下り廣瀬淡窓、龜井革卿に従ふ、歸郷して數年の後米艦浦賀せうがに來り人心洶々たるの時遂に志を決し江戸に遊學し聖堂に學ふことゝなつた、此の間川田甕江、松本奎堂

清川八郎、小永井小舟等と交つた、後常野北陸地方を巡遊し處々で青年を集めて講義をして居つた安政六年八月清川八郎道場を神田お玉ヶ池に移した、池田は當時麴町に私塾を開いて居つたが常に道場に入出し攘夷の大義を謀議した、四方の志士も集まり山岡鉄舟も時々訪ねた、遂に幕府の偵察頗る嚴重となり、或る日兩國で書畫會があり一行十余人見物に出掛け歸りに一杯傾け酔歩蹣跚として歸り來る處に無禮者が出て清川は一刀に之を斬殺した、之が騒ぎの原で捕手に追掛けられることとなり清川は江戸を逃がれ、池田が踏止まり捕手を引受けることゝなつた、此一行には山岡鉄舟伊牟田尙平安積五郎あきやすだの各地の浪士が居つた、池田は道場で待構はて居つた何分多勢の捕手で清川の妾お蓮を始め一同を捕へ池田の妻も捕へられたが妊娠中であつたので預けられた、池田は小傳馬町の牢屋に入り間もなく牢名主となつた、牢中の悪弊を矯めたことも數々あるのだ、約一年入牢中にお運其外同志は大方死んだ、文久二年正月坂下門外水戸浪士の義舉より幕政一變し九月には旗下某に預けられ十二月には放免の身となつた、其預け中の書信に

私儀も昨年九月より十二月迄大疫病相わづらひ絶食夢中に至り候事度々に及ひ候、とても一生難保と殘憾なから覺悟仕候、御吟味筋の御書付に皇國の御爲筋と相心得候より存立候得共匹夫の身として云々云々の大事相謀るに及び候段不屈の至など(中略)迎も首はなきものと心得餘七人の

罪を一身に引負私人死刑に就き候とも餘の七人は出獄致させ候はんと心得定め居申候、本々皇國に忠義の相立候は、我身も自ら顯要に相成可申其節孝養を遂げ（中略）實に天地の間至誠の精氣より猛烈なるものは無之、方今天下の形勢大に相變し候は抑天命の然らしむる所とは乍申本是匹夫の忠心義氣騰發して所致也櫻田の一件水府浪士の手際は實に萬古未曾有の勇舉なり吾皇國の義忠の萬古に卓越する足觀也（下略）

清河や池田は暗合か將た共謀か浪士を集めて之を順撫し幕府の壓迫を緩うすることを建議して遂に採用せられて浪士局を設けた、池田は浪士探索の任に當り山岡と清河が上下斡旋の中心となつた、池田關東八州へ乗込んだが中々の人望があつたものか初めの豫定は五十人位であつたが遂に三百人と云ふ多數のものが應じたのだ、此多數のものが江戸へ乗込めば騒動の恐れもあれば費用もかゝるので途中から山岡清河に尋ねて遂に江戸入となつた、處が關東壯士の荒くれもの仕給は少し意に満たぬ處はあり騒ぐの騒がぬの迎も手の着けられたものではなく、係り役松平主税介も辭職するといふ有様、池田は意見書を出し將軍家茂の上京に先だち入洛せしめることゝなつた、鶴殿鳩翁が浪人取扱で山岡、清河、池田等十余人が取締として東山道を経て入洛した、壬生の新徳寺を屯所とし高橋泥舟に命じて統制せしめることゝした、是迄総て浪士等の活動の目標は攘夷のみであつたが此時

初めて尊王攘夷と云ふことになり幕府を倒すことを主張する様になつた、即ち尊王攘夷黨が出来上つたのである、云ふまでもなく首唱者は此浪士の中心の人々である、是に於て清川等は屢學習院に建議をなし急激に攘夷の實を擧げんとしたが獨り池田は感ずる所があつた、幕府は勢力日々衰へ攘夷を行ふに足らず、浪士は烏合の衆、徒に騒擾を事とするのみ、遂に決する所あり彼等と斷絶して京都にある廣島藩邸に投じた、實に一大勇斷であつたのだ、時に文久三年二月の事で將軍上京前のことだ、一方浪士等は餘り乱暴するので江戸に返すことゝなり、歸らずに幕府の爲に盡すと決心したのが近藤勇等の新撰組だ、池田は廣島へ浪人として召抱へられ五人扶持を與へられ内密御用向を勤めることゝなつた、此間に密使として江戸に下り或は京攝海防兵組織を計畫したこともある、御手洗では薩長土藝の會盟にも列席した、長州再征の時は幕府に告げて之を阻止せんと計つたこともある、藩の財政にも與り金の借入に關係した、教育殖産にも意を注いで居る、農兵組織の建議をしたこともある、小鷹狩介之丞の庇護を受け船越術と事を共にし常に擁護して居る、明治政府となつて徴士として召出され、軍務官權判事を命せられ東北遊撃軍將副參謀仰付られ尋いで參謀となり出征した、元年十二月七日には權辨事を命せられた權辨事は准大臣とも云ふべきものだ、當時は官職の別も明かではないが直に知縣事を命せられ常陸下総の管轄となつて居る即ち權辨事の官で知縣事

の職に補せられたものと見ゆる、是は地方の幕領を治める爲めである、二年七月には若森縣權知事に任せられた、此時の知縣事は東京が大木民平大阪が後藤象二郎新瀉が西園寺中納言兵庫が伊藤、神奈川が寺島、日田が松方と云ふ連中だ、明治四年に廢藩置縣となり若森縣は區域も擴大されて新治縣となり權令に任せられた、此時種徳と改名した、五年正月に島根縣へ轉任となり中國の大縣意氣懸昂赴任したが故あつて九月辭職した、六年九月岩手縣に復起し七年二月青森縣に轉し九月十二日病を以て卒去した、明治十六年祭資料を下賜せられ大正八年正五位を贈られた、

安保清康

天保十三年三月十八日向島西村の醫林金十郎の四男に生れ林謙三といつた、万延元年十九歳長崎に至り蘭醫ボンペイに就き蘭書を學ぶ、段々に外國の事情を知り感ずる所あり英書に依り海軍術を修めることゝした、何禮之助の塾に入り後瓜生三寅兄弟卷退藏(前島密)橋恭平、高橋顯正(芳川)等と寺院に寄寓して日夜研鑽す、卷は間もなく島津侯に聘せられ、鹿兒島開成所に英學を教授することゝなり、林と橋に助教になれと申來つたので二人共鹿兒島に行つた、或時西郷隆盛坂本龍馬と國府温泉に會す、海防の必要と王政復古すべきを説く西郷之に感し、島津侯に説き再び長崎に學ば

しめた、碇泊中の英艦アゴス號に就き研究す、アゴス號兵庫にあるの日薩士吉井幸輔來りて薩藩軍艦を購入せんとす、鹿兒島に歸り之が艦員を教授せよと、辭するも聞かず、遂に退艦した、慶應三年島津久光命に依り上京す、林の指揮する練習船三邦丸を以て乗用とした、後長崎に至り薩藩の爲に軍艦を購入す是が春日艦だ、十一月十四日急使により上京し坂本龍馬の凶徒の手に斃れたるを見之を島邊野に葬つた、十二月侯命により西郷大山と共に三條等五郷を博多にて春日に仰へ兵庫に航し陸路護衛して入京した、明治元年正月榎本武揚指揮の回洋以下六艘、威を攝海に振ふ、林密に春日に還り平運翔鳳の二船を護り敵艦の封鎖を破り兵庫港を出で紀淡海峽を過ぎたが回洋追跡し來り戰爭となつた且より晡に及び勝敗決せず急航鹿兒島に還る、此時の大膽の行動を見て春日には英人が乗込んで居ると思つたと榎本が語つたと云ふことである、西郷の依頼により藩士三百を春日に乗せ越後に直航した、明治二年朝命に依り兵庫軍務官となり北海道募兵を討する爲め出師を完うした七月軍務官を大阪に移し兵部省と改め兵部權少丞を命せられた、官祿二百七十石、大村兵部大輔來りて囑するに海陸軍創業の大任務を以てした、十一月兵營學校等を建設し佛國陸軍の下士を雇ひ教導隊を募集して陸軍の創業に従事した、三年九月徵兵の必要を説き遂に一萬石に付五人の壯丁を出すことゝなる、同年大樂源太等の暴徒を討つ、四年八月陸海二省を置く陸軍中佐に任せらる、大阪

鎮臺第二分營高松在勤を命せられた、五年九月海軍中佐に轉任す、六年五月海軍提督府設置の議あり林、命を承け地點を撰定し三原を舊城郭、長崎を稻佐砲臺とした、七年佐賀の乱に軍艦雲揚を發せしめ林も長崎に急行した、海兵隊急行して佐賀城を奪ふ、賊狼狽遁走し陸兵到らざるに事平いた三月臺灣蕃地事務局を東京に置き林御用掛となつた、十三年二月海軍少將に任せられ東海鎮守府司令長官に兼補せられ海軍省副官兼軍務局長故の如しと云ふのだ、廿三年海軍中將に任せられ海軍大學校長兼海軍將官會議々員に補せられる、廿四年六月佐世保鎮守府司令長官に補せらる、廿五年十二月豫備役仰付けられた、廿八年五月吳鎮守府司令長官を授けられ、廿九年二月職を免ぜられた、六月華族に列せられ男爵を授けらる復姓して安保清康と云つた、四十二年十月廿七日薨去し從二位に叙せられ旭日大綬章を授けられた海賊の根據地に生れ海軍の創業者となる豈に偶然ならんやだ、

三、沼田の海賊

前章に於て抽象的に皇室に關係ある土地と人とを書いたのであるが、今は少しまとめて書いて見たいと思ふのである、此の地方の文化は陸には八幡、海には沼田の二中心がある、八幡は陸上發展であり沼田は海上發展である事は云ふまでもないことだ、一たい民族發展の始めは生存競争から起るので人と人と争ひ、家と家と争ひ、部落、村、郡といふ風に段々進み遂に國となり國家を作るのである、我國では其最小部落を「名」と云ひ、數部落の集まりを「字」といつたようだ、後に「名主」と云ふ語が出来て部落の頭といふ意味となつて居る後に漢字が發達して「名」を音で稱へること、なり「名」といふことになり友實名とか則重名とか云ふようになった、此の友實とか則重とかは其處を開發した人の名である、それから名字（姓）とか字（氏）とか云ふ語が出来たのではないかと思はれる、この名を幾つか持つて居る人が小名であり澤山持つた人が大名であるのだ、海上でも同様であるがどんな名稱が出来たかは文献がないので知ることが出来ぬ、陸上から云ふて海賊といつたのだ、後には荒いもの強いものと云ふ意味で彼等自身に海賊大將軍と云つた時代もあるのだ全く海賊と云ふ語は海上に勢力あるものといふ意味になつたのだ、

さて沼田の海賊の發達も同様で土地が犬牙錯綜最も根據地に適して居るので夙に發達して一大海賊

群が出来て居つたと思はれるのである、固より二千六百年の古が考へ得られる筈もなく、又當る譯もないが、とにかく想像して見ることにするのだ、

神武天皇が御東征あつて安藝の埃宮に御滞在になつた、此間段々に部下のものを出されたり色々せられて東方の海賊に渡りを付けて或は之を伐ち或は之を撫順せられた、此時沼田の海賊や尾道水道の海賊は早くも歸順したのである、それで沼田は何時も忠順に皇室に對し奉り赤誠を捧げて居るのである、神功皇后の三韓征伐の時にも其灣口に御碇泊になつたのだ、是は決して水を取る爲めではない沼田の海賊に味方をさせ且つ遠洋航海をなされる爲に船を造られたものと見てもよからう、今の言葉で云へば軍艦と戦士を徴發せられたのである、此の皇后の立寄られた傳説があつたのに次の天平八年に新羅行の使が水調郡長井浦に泊つたとあるから之を合せて水を買ぎしたと云ふ傳説が起つなものであるのだ、同じくこの新羅行の使も或は此處で新造船に取替へて行く爲めに寄つたのではあるまいか、それは沼田の一部に船木と云ふ處があつて此處で御用の船を造つて居つたことは疑もないことなのだ、

海賊の最も頼りとするものは船なのだ、随つて造船術の發達したことは船木といふ地名があるからしても想像が出来るのである、

次には彼等の遺骸を埋めた古墳である御土代古墳と云ふは明治廿年代に發見したものであるが其室は高十尺奥行十一尺横六尺といふ廣大のもので其石はみかけではあるが此地方にあるものではなく遠方から運ひ來つたものと見ゆる、それが一方一枚又は二枚から出來て居るので驚くべきものである、其中に二箇の石棺があつて八尺に四尺といふ大きなものである其近傍に一箇つゝの者が二箇所あり、兜山には未發掘のものもあり北方には以前發掘せられたものか二箇所古高山でも發見したといふことである、其他小古墳は無數にあるのだ其時代は普通千五百年前と云はれてあるのだが其頃此大工事をなし得る住民があつたとすれば相當進歩したものであることを推想されるのである、眞良しんらと云ふ所は新羅人しんらを置かれた地たといふことであり文献には佐伯部を沼田の地に置かれたともあるのでは是等他地方人が入り來つて色々文化を助けたものと見てよからう其人々が來るといふことも交通の便があつた爲であり此時から朝鮮へ交通して居つたと見てよいのではあるまいか、樂音寺がくおんの縁起に藤原倫實とんじつといふものが天慶の乱に藤原純友を討つて其功に依り沼田を賜はつたとあるのだ又河野の系圖には部下奴田新藤次忠勝を遣し首を取るとあり、忠勝と倫實は同一人と見て然るべきではあるまいか倫實の行動は前太平記に詳しいので中々激しく純友と戦ひ遂に瀬戸内海には居れなくしたのであるが、首は猶持つて居た様だ、是れで此時代には河野と同一位かそれ以上に勢

力があつたことが知られるのである、尾道の海賊は純友方であつたと見えて尾道五郎が居ると傲語して居るので知られる、

永観頃に撰はれた和名抄といふものに據ると沼田郡に今有、沼田、船木、安直、眞良、梨葉、都宇の七郷が之に屬して居る、他の郡に比して僅か三四里の間に集まつて居ることを異に感するのである、是時代既に如何に多数の人家があつたかが知られるのである、

今一つ注意すべきは沼田郡には眞良、梨葉、都宇の三驛があつたことである、今も鉄道驛の接近して居る處は必ず人口の多き處である、他地方では五里も七里も隔てた處に一驛のみなのに此處では僅か四五里の間に三驛もあるといふことは人口稠密を語るものではあるまいか、固より鉄道驛とは意味の違ふことは云ふまでもないことだ、其のまた國道が沼田郡即ち海賊群の中央を貫通し海賊の墳墓と思はるゝ小丘の下を通過して居るのを見れば此所の海賊集團は嘗て朝廷に背いたことのないといふことを語つて居るものではあるまいか、

以上に依つて見れば相當榮えて居つた強大な海賊であつたことが想像せられるのである、それが源平の戦には殆ど全滅するに至つたことは前章に述べた通りである、

高倉天皇嘉應元年に太田庄の倉敷地を尾道に定めた是が尾道文化の始めであるのだ、

元暦元年に土肥實平は備後の守護として下つて來た、守護は國司の管する地域の目付役であるのだが、實平は中々それのみでは満足しない、到る處の莊園を荒し廻り子遠平と共に相當勢力を張つたが遂に頼朝から戒飭を命ぜられた、そこで方面を代へ自分の任地以外なら宜からう且つ海賊は衰頹の極に達して居るので抵抗力はなしで遂に沼田の地に目を付けたのだ、果して意の如くなり遠平の時に至り頼朝より宛行はるゝことゝなつた、こんな譯で承久の役には竹原や生口の莊官等が朝廷方となつて居る丈けで沼田は動くことは出来なかつた様である、弘安四年元軍襲來の時も出征したところと思ふが何の文献もない多年の戦闘に海賊達の武器は一跡何處から供給したのであらふか、花園天皇正和の頃に至つて段々回復したものと見えて爰に自給策を講ずるに至つて三原灣中の大島に於て(舊城中二の丸)刀劍の鍛冶が始まつたのであるが三原刀で初代を正家と云ふのだ、それが三原灣の南北に分れて一は貝野で始めた之を見三原と云ふのだ、一は糸崎でも作つて居る、是が尾道、木梨、福山、鞆と分れた備後鍛冶なのだ、二三代頃から相當上手になつて所謂大業物といふのが出來たと云ふことだ、

建武中興の時は前に述べた通り小早川朝平は船上山へ馳參じて居る其前に櫻山慈俊は三原から起つて居るから其時から氣脈を通して居つたのだらう、其外八人の南朝方があり因島に法橋幸賀のあつ

たとは前に述べた處では等に海賊が参加したことは云ふまでもないことである、應仁の乱の時の事は述べるにも及ぶまい、是より方向を轉じ海外發展の事に及ぼうと思ふ南北朝頃から海賊や武士は内地の戦も面白くなつたので朝鮮支那へ向ふことゝなつた、しかし先方では海賊が來た和寇が襲ふたと云ふのみで何處の海賊か知るよしもないので文献の徴すべきものがないのだ、獨り朝鮮の海東諸國記といふものがある之に依ると備後の内に五人行つて居るのだ、

丁亥の年使を遣し來り觀音の現象を賀す書に備後州海賊大將カキハ檣原左馬助源吉安と稱す

丁亥は應永十四年だ源吉安は村上氏因島であらう、

戊子の年使を遣し來朝す書に備後州高崎城大將軍源朝臣政良と稱す

應永十五年高崎は豊田郡大乘村の事だ

戊子の年使を遣し來朝す書に備後州友津代官藤原朝臣光吉と稱す

是は鞆の事で村上氏だ、

戊子の年使を遣し來朝す書に備後州三原津太守左京助源家徳と稱す

家徳の出所は不明なれども沼田の海賊なることは明かだから小早川系の人だらう、次は己丑の年即ち應永十六年で備後州守護代官山名四宮源朝臣忠義と稱して居るのだ、

安藝が四人

庚申の年使を遣し來朝す書に安藝州小早川美作守持平と稱す歲に一缸を遣すを約す父は常賀國王に近侍す

庚辛は永享十二年で持平は則平の子だ年々定期的に渡航することを約したのだ、

海賊大將藤原村上備中守國重は甲申即ち應永十一年、安藝州太守藤原武田大膳太夫教實、嚴島太守藤原朝臣公家は共に戊子即ち十五年に行つ居るのだ、

支那となつては相當年數も長いが誰が來寇したかは不明であるが沼田海賊も因島も行つたことは間違なく我々祖先の骨は舟山列島等には澤山埋まつて居る譯だ、

隆景の時代となり隆景は毛利家の海軍大臣であり浦宗勝を軍令部長とした、そして自家の海軍を指揮すると同時に村上海賊との交渉に當つて居る、嚴島戦争の時は三原衆と稱し六七十艘しかなかつたが能島、久留島、因島へ交渉の結果三百艘も來たといふことだ、

隆景は永祿十一年に河野通直を助けて遂に宇都宮豊綱を三原に囚へたことも前に述べたが天正十三年に秀吉を助けて四國征伐を行ひ其結果河野通直を竹原に移し伊豫三十五万石の大名となつた是れ全く源平戦争に河野海賊の爲に散々の目に遭はされた沼田海賊の爲に復讐をした譯である、

朝鮮征伐の時には是等海賊達の奮闘は云ふまでもないが沼田は矢張隆景の手兵として従軍したものである、此に就いての記事は最も乏しいのであるが今秀吉の感状があるから之を載せて筆を置くこととする、

七月十六日注進狀今月九日到來加_二披見_一候、今度番舟唐島に在_レ之而釜山浦表切々取出日本通路相支候處去十五日夜相動彼番舟百六十余艘伐捕唐人數千人伐捨其外海へ追はめ并先々津々浦々十五六里之間之舟共悉燒捨候由手柄之段無比類候以來迄番舟根切仕候事御感不斜候何も歸朝時可_レ被_レ加_二御褒美_一候猶德善院増田右衛門尉石田治郎少輔長東大藏大輔可_レ申候也

八月九日 秀吉朱印

羽柴薩摩侍從とのへ

島津又八郎とのへ

小西攝津守とのへ

藤堂佐渡守とのへ

脇坂中務少輔とのへ

加藤左馬助とのへ

(昭和一五、九、二三、佛印進駐の日)

408

436

昭和十五年十月十日印刷
昭和十五年十月十五日發行

二千六百年
紀念發行

著作權者

三原市本町一七五〇番地

澤井常四郎

印刷人

福山市桶屋町一九九番地

岡田軌道

印刷所

福山市桶屋町一九九番地

成文社

發行所

三

原

圖

書

館

終

